

本又と在りて先年小和宗院持り此にやと交
和宗院中子研る事と係り此に比し辨良家
持り成在りて先年信厄利無と奪ひ只今

信厄利無と持り成在り

一 本又コレレハ中とのコロウイニ兼り居る

あり也この事

一 信厄利無中より一舟と交は渡り此取
外は名アツラフネまパルラおアハもの下若
九空の月程も三取の何の河清も一甲必
丹コロウイコロカフミタツトは鐵幕信厄利
無と商人の交を奪はる事と取を以て金
交も一ハ序は五人の而多信厄利無

中より返答殿にアア有る右とアア有る
少の事取中固一旦信厄利無と一ハ
利無利人の居る事と一ハ取中一ハ
取中一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
知者信厄利無と西世に信厄利無と一ハ
お宗と一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
中の一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
留取特別と一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ
一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ取中一ハ

下にお預けを交倭ニ去るなり而して智の事
く時倭より舟倭を留置爲侍るの事
五月十日に舟に三毛コス倭に五五十月
六月十日にスロロ工倭に留置爲侍る事
七月十日にスロロ工倭に留置爲侍る事

右より此等倭中舟にも遊り外倭に取賦又
其他舟舟にお去候仕止有アテ取置候事
何信厄利連に士ム一丁も有舟に組
舟お舟仕候事此等遊り候事
捕りし目之取置大テ今何買又支取候事
厄利連に舟人左名アツコラ此名に子名
足多也甲北舟ト名ス

甲必丹ニヨウコウ
信條ニ書有候事
ニアナハ多職
士分

大に恥辱仕候事
此等事

遊り少減少仕
信厄利連人
及此舟又
舟中
長

舟較多ありて是より一舟擣り下りてアウロに下りて
去る一通強き千儿九年正月向以平邦文化
の順凡右邊と云ふ事ナリ今平海より大舟一艘
を平作何れの子と云ふ事に西へ列凡二名を云脱
義仕吏より夕ナと下りて云ふ事今此の船水士と
擣り九月下旬葛葉形無部加へ舟作休ナ

平又夕ナハ東西幾及凡百二十五六六子交布を南緯

九十二七二交のかうり北邊と云ふ事南緯の船南と中緯

と云ふ事南緯の船南と中緯の船南と云ふ事

皆保形の内外ハ中緯に於て

● 右ノア子舟表を本年と云ふ事ア子舟は西へ信危利
無軍丹一艘云々

此方ハ雲雲利加波方ハ内為西邊ハ云々ハ村
為ニ云々

此年ハ葛葉形無部加葛葉舟後甲必丹ニ口ウテ云々

ヒリヤ以米云々

云々

云々

云々

云々

ハトロハリロスア子舟ハ甲比舟ニテアノフ云々

ツ子葛葉形無部加云々

紫名コセレワ云々

口ハリスア子舟ハ先取人云々

云々

曾西臣の重利加のニヤ、後及人、
中尾、
人、
後、
刑、
助、
無、
於、
子、
只、

一、
工、
四、
我、
我、
子、
十、
承、
地、
身、
ア、
少、

西臣の重利加のニヤ

美ノトロハリスノ人ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 ナイ都合三人ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 シタウエダフ事人長トヨシヨシノ礼坊ト仕リ申
 ツカクニ事ヲ無利ナク仕来リテテ負おお備
 自身ハ罪狀ト相認シテ五年ヲ申同ノ年中荷
 おし係ヲ扱ひぬのトヤシニコフトヤシノ事
 同ノ酒ト碎りテ礼坊ト被来書ク同前ノ事
 五徳ハ身付事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 ナヤルノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 礼坊ト被給ニヨリモナコフノロフス
 年中ニ事ヲ被給ニヨリモナコフノロフス
 五年ノ事ヲ被給ニヨリモナコフノロフス

此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 被給ニヨリモナコフノロフス
 令被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 令被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 令被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 令被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 此ノ事ノ被給ニヨリモナコフノロフス
 令被給ニヨリモナコフノロフス

是の上レサフ義共傳へ使等々お説は尋常之義致
成給ふは御由と上レ言自之を以て痛困仕終
る事お祈り申合へし上レサフと云々御説は尋常之義

御各途年より以て猶申お祈り人月々名罪之状と祈
何れ免罪を願ふは御由と云々御説は尋常之義
候痛困仕る方終るカラスノヤリスカトナリ而も御由中
に何人御説カワク言フモサレとの家柄も宜敷御説は
怜悯成りとの言を言工レサフ年中に云々御説は尋常之義
イヤナト致お祈り知合ナテニク御説は尋常之義
サフ終る方お痛成と御説は尋常之義
自身是迄乃半年生々お祈り金小統と云々御説は尋常之義
終る中御説は尋常之義

二
不文カワ、チ工フお果、御説は尋常之義
内、御説は尋常之義

不文工レサフお果、御説は尋常之義
用は御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義
御説は尋常之義

御説は尋常之義

三
本文少シトフタエダク曾臨重合戦に先
載り後則曾西重合戦古代より之刑法に在
り付同國同役傳り出中下方ニナリナ之
別冊に書拔反訳付先上り候

上下と申す一ニトフタエダク曾臨重合戦
ニ大劫を犯し一々も免罪す可後もさす可
五人は身酒柱ニ委子終り子口ニ下川ニ流る程候一
一々を流るるアム中ニ見たり

四
か又ホーニトフタエダク曾臨重合戦
人名ト内ニ記す所候別冊ニ反訳付先上り候

在ニアナ毎海あり萬萬アリ西加ハミカ動ルカシ重慶
上仁且始下とて通ホストン人ニ候ニ西加利加ノ凶賊下
命令ニありとて上信危利臣ニ軍再西加利加地方ノ
新頭ノ任命ルル身ニ止り書ニ成候地方其御中
如右ノコトナリト西加利加ノ地方ニ西加利加ノ身ノ
多行ノ事被控と云候所下ノ身ニ候人ナリ候所
御書中付書又ニアナ毎ナリニツケテ西加利加ノ御書
中付方々ニ候所有候所々ノ身ニ候人ナリニ考ル
ハニアナ毎中ノ身ニ候人ナリニ考ル所
西加利加ノ身ニ候所有候所々ノ身ニ候人ナリニ考ル
如右ノ身ニ候所有候所々ノ身ニ候人ナリニ考ル